

特集

これからの日本保育学会に期待すること

これからの日本保育学会に 求められていること

柴崎 正行

学校も自己評価・自己点検が求められている現在、日本保育学会も自己評価をして改善すべき時期にきている。そこでどのような観点から本学会を評価し改善すればよいのか提言してみたい。

1. 学会の設立理念を改定する必要はないのか

本学会が「保育に関連する諸問題を科学的に研究し乳幼児保育の確固たる基盤を確立すること」をめざして設立されてから56年が経ち、会員が4000人を超えるほど巨大化しつつある。だがこの間に、乳幼児の発達や教育などを対象に含める学会がいくつも設立された。こうした流れの中で、本学会はどのような理念を掲げて活動を展開していくのか、その存在意義が問われているといえよう。心理学や教育学、社会学や医学など近接している他学会とどう関係し交流していくのか、保育学という独自の学問領域を確立したいのかなど、他の学問領域との関連性も含めてもっと理念を明確に掲げることが求められているのかも知れない。

もし、こどもたちの実態に即した研究や現場の保育者の実践研究を重視するのならば、もっとそのことを学会としての理念の中に明確に掲げるべきではないだろうか。またそうした立場から、こどもと子育てに関する問題に対して他の学会とも協力、連携していくことができるであろう。そのことにより、わが国における保育の意義と位置づけがもっと明確になるのではないだろうか。

2. 地域や社会ともっとかかわるべきではないのか

保育学会は保育現場の実践と密接に関連している学会である。そのために、そうした保育実践を大きく左右する国や地域の保育政策や保育行政についても、その研究対象に含めることはもちろんのこと、そうした保育行政関係の人々とも連携してもっと積極的に保育政策を立案したり提言する姿勢をもつべきではないだろうか。

以前なら研究者は研究だけをしていればよかったかも知れない。しかし現在の保育現場は、子育て支援や幼保

一元化、そして保育施設の公設民営化などをめぐって混乱している。こうした混乱の原因のひとつに保育学会がこれまでこうした社会的な保育問題に対して具体的な関わりや提言をあまりしてこなかった点があるのではないだろうか。その結果として保育政策を審議・検討する場に、保育学会に所属する専門家が必要であるという認識は形成されていないのが実情である。本学会は地域や社会ともっと積極的に関わり、保育問題について提言する姿勢と仕組みを持つべきではないだろうか。

3. 保育者の養成や研修に積極的に取り組むべきである

最近では子育てや保育が多様化し、それに伴い保育者の質が問われるようになりつつある。しかし保育者の養成や研修がそれに対応できていないと思われる。具体的には、保育が多様化している現在、幼稚園教諭と保育士資格の内容と養成制度がこのままでよいのかどうか。もし一本化することが可能であるとすると、どのような内容にして養成制度をどう変えればよいのか。さらには、こどもと保護者が多様化する現状の中で、もし保育カウンセラーのような専門家が必要であるとすると、その役割や養成の仕組みをどうするのか、など取り組むべき課題はたくさんある。

こうした課題研究に学会として取り組むことはもちろんのこと、公私立の保育団体や行政とも連携して、学会がそうした研修を企画し実施する仕組みを積極的に構築すべきではないだろうか。保育学会は保育研究を志す会員の発表の場であると同時に、保育に関心を持ち保育者を志したり自らの質を高めようとしている院生や現場の保育者の学びの場でもある。しかし後者の会員の要望に、どれほど真摯に答えてきただろうか。もっと保育者の養成や研修に対して積極的に取り組む姿勢と仕組みを持つべきである。そのことが保育界を代表する学会としての、社会的責任を果たすことであるといえよう。

●Profile

柴崎 正行 (しばさき まさゆき)

大妻女子大学児童学科教授。専門は保育学、幼児教育学。

学生時代から子育ての悩みや歴史について関心を持ち続け、最近では主に保育の仕組みや歴史、発達を保障する環境や援助の在り方に焦点化して研究を進めてきた。これからは保育現場に根ざした日常保育の臨床的意義についても、積極的に探究していきたいと思っている。

保育の「新」と「真」・「子ども」を核とした 更なる理論と実践の融合を

平田 美紀

2005年(平成17年)の第58回日本保育学会のテーマは「こどもを原点に一保育実践研究の再構築」である。故・大場牧夫先生の御著書を思い出しながら、このテーマを再度かみ締めてみる。保育実践との結びつきが見える文献や研究、言葉に出会うと体の芯からそれを感じていることに気づかされる。感覚的であり、まだまだ研究者としては未熟だ。

日本保育学会に初めて足を運んだのは大学生の頃であった。もう20年も前のことになる。私は、保育者であり園長であった母の姿を見ながら保育園の中で育ち、小・中・高と過ごしてきた。大学に進み幼児教育・保育の免許・資格取得の為の学びを本格的に始め、保育の奥深さ、保育者の重要性に気づき出し、長期の休暇には実家の保育園でその模索をしているようなものだった。期待に胸を膨らませ保育学会に参加した新参者が感じたことは「保育園の存在がほとんどない」であったと記憶している。発表内容のおおよそは幼稚園を中心としたものや、研究者のための研究に感じられた。「養護と教育が一体」となった営みが「保育」であり、「子ども」を核にすればどこの場で生活していても、そのような「保育」が保障されなければならないという基本をごく当たり前に染み込ませていた者にとって、この現実、ひとつの衝撃であった。

しかしその後、補助者や観察者ではなく、実際に保育園で子どもたちと生活を共に創る保育専門者となった時、日々の煩雑さに保育学会での現実を納得したり、潰れそうになったりもした。そこで「保育者の専門性」「保育の質の向上」を探求したいというジレンマを抱きながら一つの結論が出た。保育園に研究者を巻き込む。その研究者は「子ども」や「保育」が解っていること、もしくは解ろうとしていること。しかも研究者のそれが解ることは、自分自身がそのような保育者になっていかなければ始まらないことであった。

昨今、そのような潮流が保育学会において見事に感じられる。この10年、研究発表区分にも「幼小連携」から「幼保一元化・幼保小連携」へとといった変化や幼保・研究者のシンポジウム、発表が多く見受けられるようになった。社会・地域・家庭・養成校・集団保育の場等全てを含め、子どもの育ちと生活を核とした「グローバリズムとローカリズムという大きな思潮」(大場幸夫準備委員長談)に着目し、研究者と実践者が「保育学」の構

築に果敢に挑み続けなければ、人間の育ち自体が危うい時代である。次世代を創る視点から、広義の概念「大人全てが保育者である」というメッセージとネットづくりの「新」を発信しつつ、子どもにとっての「真」の保育を探求・継承していく学会であることを期待し、更に発展させていく会員の一人になっていけたらと願うばかりである。

最後に、私の研究者としての第一歩が保育史上の人物土川五郎の研究であった。彼は本学会の初代会長である倉橋惣三と同時代に生き、保育者養成にも尽力した一人である。音楽家・舞踊家・研究者・遊戯創作者等、肩書きは多様にあった中で、「私は保育者である」と言い切っていた彼の言葉は、私の原点になっている。子どもを核とした「保育」という言葉のもつ意味の深さに改めて「保育学会」への期待と重みを感じるのである。

●Profile

平田 美紀 (ひらた・みき)

沖縄女子短期大学

研究内容 (今後研究を深めていきたいテーマも含めて)

保育者養成校の現状と課題、保育者のリカレント教育、乳幼児期の表現

「対話」の場としての日本保育学会

三谷 大紀

大学院に入学して以来、約5年間に渡り、観察者として都内のある幼稚園に赴き、その園の実践にかかわってきました。その観察過程は、私自身の保育を見る「まなざし」の変容過程であり、保育者との「対話」の生成過程でもありました。

観察初期、保育者が新入園児の対応に追われているなかで、自分の観察したい子どもの姿をじっくりと見られる立場に私は置かれていました。そんななか、観察している子どもが要求していることや保育者がすべき援助が見えていると思ひ込み、観察した出来事を自分の枠組みに当てはめることで、私は観察者としての自己を保とうとしていました。

しかしやがて、それぞれの子のやり方で自分の世界を広げている姿に出会っていくうちに、そうした姿は私自身の一方的な枠組みでは捉えられないことに気づき、目の前の子どもの姿を素直に喜んだり、面白がったり、悩んだりするようになっていきました。同時に私の観察園でのあり方や、保育者から見た私の存在も変わっていき、お互いから見た子どもの姿を共有するようになっていき

ました。私と保育者は、それぞれが見たことをただ「伝達」するだけでなく、見えてきた子どもの姿のもつ意味と意義を協同的に形作る「まなざし」を共有する関係に変化していったのです。

このように、思ってもみなかったような姿を子どもたちが見せてくれることを通して、また、その姿を多様な他者と共有し、そのなかで保育者や観察者である私の「まなざし」が変容していくことを通して、子どもの姿を賞味・吟味し合える「対話」が学び合う関係を生成し、それぞれの「学び」や「育ち」を支えていると感じました。さらに、そうした「対話」を通しての学び合いが展開されていくなかで、外部の観察者や研究者、若手保育者やベテラン保育者、保護者や地域の人々であったとしても、その人の立場から見えたことが「対話」のなかで共有され、賞味・吟味されていく時、その場の人々の解釈や見方を重層化していくことになり、結果として、その個人から見えた「事実」が、その場の人々の「学び」を支えていると実感しました。

保育学会は、保育にかかわる実践者や研究者の様々な立場や背景をふまえた「まなざし」とその意味、意義を深く味わう場ではありますが、同時に、私のような「子ども」や「保育」について学ぶ大学院生にとって、自分なりに「新しく」見えてきたと確信する知見を発表・提供する場でもあります。保育学会の魅力・特殊性は、実践者と研究者、それぞれのベテランと若手とが、「子ども」や「保育」についてともに考え、よりよい「保育」を、相互の「対話」を通して探究していくことにあります。自分なりの観察や研究から見えてきた知見を発表・提供し、多くの方々に共有してもらうなかで、自分自身の「見方」を問い直し、重層化していく一方、自分とは違う視点をもつ実践者や研究者の問題関心を「対話」を通して共有していくことでも、自分の問題関心を多元的に捉え直すことができます。このようなことから、保育学会が、今後とも、個々の実践や研究の多様性と当事者性を認め合い、見えてきた知見の意味や意義を賞味・吟味し合える「対話」の場になっていくことを期待しています。私自身も保育学会がそうした場になっていくことを、様々な人や子どもたちとの出会いを楽しみながら、尽力していきたいと思っています。

● Profile

三谷 大紀 (みに だいき)

青山学院大学大学院博士後期課程

研究テーマ：保育現場において多様な他者やモノのかかわりのなかで相互構成されている、子ども・保育者・研究者の「育ち」や「学び」について関心を持っています。現在は、保育者の「学び」を支える多様な他者やモノの存在に着目しながら、保育者の熟達過程について研究を進めています。

保育学会および保育研究に期待すること

山縣 文治

私が初めて保育学会で発表させて頂いたのは1981年のことである。ショートステイや一時保育のニーズが高くなっていることに関する分析であった。当時、岡田正章先生から、「このようなニーズに社会がどのように応えていくかが、課題になるのでしょうか」と励まされたのを、今でも覚えている。翌年は、夜間保育に関する発表をおこない、終了後、新聞社の方々からさまざまな質問を受けた。20数年前といえば、一時保育や夜間保育の実践や研究は極めて異端の領域であったが、大学卒業後実践現場でひしひしと感じていた内容を、拙いながらも社会に伝えたいという思いだけの発表であった。

当時の我が身を振り返ると、研究計画も研究手法も、今日の人たちの姿勢に比べると冷や汗ものである。しかし、現場の様子を伝えたいという情熱だけはそれなりにあった。その後の25年もそれだけで走ってきたような気がする。私のような人間が、私の人生以上の歴史をもつ保育実践や保育学会に期待することをしたためるのはおこがましいが、編集者からの依頼もあって、あえて、自分自身の保育学研究の姿勢として、3点だけ意見を述べさせていただく。

第1は、私自身が不十分ながらも常に心がけてきたことであるが、実践や当事者に向かう姿勢である。保育研究の多くは、現に生活する人たちを相手にすることが多い。しかし、研究を意識して生活している人や実践をしている人はまず存在しない。研究者と称するものがいくら美辞麗句を並べようとも、現場にとって研究の多くは、障害物と考えられている。興味本位の調査や観察は、倫理上も問題がある。研究と現場の関わり、とりわけ研究結果の還元を常に意識する必要がある。現場に対する謙虚さのなかから、生活者や実践家の真の悩みを体感し科学化していく、このような研究姿勢が、今後ますます重要になると考えている。

第2は、保育研究から保育学研究への視座をもつことである。学会発表や保育研究に関する論文をみていると、実践報告としての価値は十分に認められるが、そこに「保育学」の志向が必ずしもみられないものが少なくない。科学としての保育学は、どのような価値基盤にたち、知識や実践方法を蓄積していくのか。歴史のある保育学会ではあるが、保育学としての理論的な志向は必ずしも強くないように見受けられる。応用科学であり、実践科学であるとはいっても、それ相応の理論および知識体系

がなければ、科学を標榜することはむずかしい。これは、保育学会員としての現在の私の大きな課題であり、引き続き努力していきたい。

第3は、いまだ私にはほとんどできていない課題、国際的な視野をもつことである。研究上の師の一人の口癖に、「ますます国際的に、あくまで日本的に」というフレーズがある。この言葉を30年間かみしめているが、いまだ行動化できていない。保育は文化であり、海外の制度や実践がそのまま導入できるものではないが、子どもが育つという基本は共通である。海外の研究のなかから、いかに日本的な意味をくみ取るか、単なる紹介ではない国際的視点の研究が求められている。とりわけ、現在、幼稚園と保育所の制度見直しが国次元で進められているなかで、海外の取り組みとその成果や限界を明らかにすることは重要である。

●Profile

山縣 文治 (やまがた ふみはる)

大阪市立大学教授

児童養護施設での児童指導員や夜間保育の実践から大学の世界に入る。現在では、地域子育て支援など、就学前の社会的支援策の再編成、保護者同士の支え合いの組織化、子どもの虐待問題など、子ども家庭福祉全般に関心をもつ。2004年には、地域住民とともに「みなくるハウス」という地域活動の拠点を開設し、市民活動にも取り組んでいる。

日本保育学会に期待すること

石川 由里子

《保育現場の声》

保育現場から「保育学会ってあるの」、「参加したことはない」、「研究者の会でしょう」と様々な声が聞かれます。保育現場に於ける保育学会の知名度は、さほど高いとは言えないかもしれません。研究者の特別な研究会という印象から、保育者が気軽に参加しようというまではなりにくい実態ではないかと思われまます。

現在、保育の現場には研修や研究の時間が取れないという現実があります。教材研究の充実や保育者の資質向上の必要性和同時に専門性を高める事などが要請されています。一方では、子育て支援事業として預かり保育や延長保育の実践も求められています。さらに、幼児教育での学びが小学校以上の生活や学習の基盤づくりとなるためには幼小の連携の実践も課題です。どれも、現在の社会状況から必要なことだと理解できますが、保育者達は身動きしにくい状況にあります。課題山積の今、どうすればいいのだろうと迷路に入り込むような心境です。

《保育セミナーの開設》

このような現状の中で、本園では保育士や幼稚園教諭、小学校教諭にも参加を呼びかけ「保育実践土曜セミナー」を平成14年から開催しています。16年度は年間6回実施し、特に小学校教諭を交えての「就学前の学びや幼小の連携の現状と課題」についてのセミナーでは、参加者の赤裸々な意見が活発に出され、大変意義深いものがありました。本セミナーが、徐々にですが、定着しつつあるようにとらえています。

《地方の実践と保育学会の接点》

これからのセミナーの内容に、研究者としての課題追究の具体化や分析的解釈の方法を学ぶ機会ももちたいと考えています。これまでも各分野から講師の方々を招聘してきました。保育学会の研究者も地方のセミナー開催に協力いただくと幼児教育研究の裾野が広がり、課題追究が一層、深まるのではないかと思います。

保育学会に参加すると、世界の幼児教育の動向から保育の日常の諸問題に至るまでの情報を入手できることは魅力の一つだと思います。また、保育玩具のショッブで紹介されたある積木を本園の保育玩具としたところ、幼児の心身の発達に多くなる効果をもとめることができました。本園の実践を通して、園児の家庭や外の園へも本玩具が広がったことは保育学会のお陰だと思います。

このことを通して、本園は保育学会参加後にいろいろな情報を可能な限り伝えるという役目もあるのではないかと認識を深めた次第です。

《保育学会への期待》

保育学会の幼児教育への貢献度は大きいと思います。今後の保育学会に期待することとして次の4点を掲げました。

- ・誰でも気軽に参加できる会への工夫
- ・保育学会の一般向け(会員外)学会案内の送信
- ・夏休み長期休暇中の研究会の実施
- ・学会員相互のネットワークづくり

●Profile

石川 由里子 (いしかわ・ゆりこ)

熊本大学教育学部附属幼稚園 副園長

研究テーマ (所属園)

「遊びの中の学びを再考する」

幼児と小学校低学年の学びのつながりを追う

◆特集テーマの趣旨◆

日本保育学会会報誌を刷新するに当たり、日本保育学会のさらなる発展の機会となることを願い、研究者、実践者、学生と、異なる立場の5人の方に本学会に対する思いを語っていただきました。